

六花

RIKIWA

1

俳句雑誌りっか
2015 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno

こん
今

いまだにほへと

山田六甲

い 一通の文をあたため去年今年
ろ 炉の隅の五徳に年酒あたたむる
は 初化粧妻の背中の丸みきし
に 二人羽織の隠芸初笑
ほ 蓬萊に旦の雨戸開きにけり
へ 臍の緒や桐の箆笥の春著かな
と 烏籠を洗ひをりたる三日かな
ち 契りおきしさせもが露を歌留多取
り 竜宮にまちつとゐたや寝正月
ぬ 糠床を怠らずをり三ヶ日
る 留守番を猫としてをり女正月
を とこらの消防半纏とんど焼
を 藁屑の田に出揃ひぬ初鴉
わ 書初の硯を猫に踏まれけり
か よそものともういはれずよ餅を搗く
よ たらちねの母は九十六去年今年

れ 蓮根の白波仕立にらみ鯛
そ そろそると運ぶ春著の子の真顔
つ 夫が睨みをきかしをり恋歌留多
ね 寝姿の但馬連山初景色
な 名を書くに変体仮名や祝箸
ら 楽隠居またふりだしに絵双六
む 無口なる婿が可愛や年の酒
う うたかたより短き夢の初めかな
ぬ 色いろの初夢ばなし笑ひあふ
の のし烏賊の水に戻りぬ初恵比寿
お おほみかみぬましし宮の除夜かがり
く 喰積に特々上の鱈子あり
や 山の端の桃太郎色雪夕焼
ま 松ヶ枝をお降りの玉飾りかな
け 鶏鳴のをどり声なる大旦
ふ 二日はや鍬で寄せたるものを焚く

元伊勢・福知山市大江町

こ 古事記読みしことを日記の始めかな
え 枝先にとどまる羽子に羽子を打つ
て 手で擦りを戻して吊りぬ注連飾
あ あなにやしえをとこをとめ姫始
さ 菜箸で向き変へらるる睨鯛
さ きぬずれや根の国の初白波に
ゆ 弓なりに帆のはらみたる寶船
め 飯粒をほほに幸先佳き四日
み 三日目は「海軍さんのカレー」かな
し 七十の言祝ぎくれし猪日かな
え 恵比寿大黒顔の初湯かな
ひ 日の峰といふは佳き地ぞ大旦
も 盛りつける爪美しき節料理
せ 前栽を正月雪で浄めけり
ぞ するすると尾の消えにけり嫁が君
ん 雲海を開き初めたり初日の出

伊耶那岐伊弉

舞鶴土産

千人代官猪の串カツも出て

爽やかや人を分けゆく車夫の声
竹を伐る一本づつの空を引き
隙間なき京料亭の秋簾
秋夕焼戸口に甘酸つばき匂ひ
くすぐつてやれば米搗くばつたかな
秋思かな秋明菊の白ささへ
落柿舎や忘れしころに鹿威
白式部むらさきしきぶ去来祭
嵯峨野路に盗人萩をもらひけり
しばらくは鹿垣に沿ふ嵯峨野越

すすきの穂大合唱の風吹けり

溝測 弘志

台風や信号脇の破れ傘

峠越え無人屋台に富有柿

すすきの穂大合唱の風吹けり

親よりも子の影長し秋の宵

貯金箱どんぐり一つありにけり

すすきのほだいがつしようのかぜふけり みぞぶちひろし

「大合唱の風」という表現に息を呑む。銀髪の漢たちが頭を振って大合唱をしていて、その大合唱が風を起こす光景を思いおこし、その光景が目の前に広がって見える。句がどこの景色でもいいのだが、私はこの句によって鳥取の伯耆大山を連想する。

雄大な急斜面一体に広がる芒に白銀の風が吹いて頂上へ駆け上って行く。大合唱その通りである。壮大な広がりを見せ、動きを格調高く詠んだ。「わーっ」と、その場にいる人々の歓声を望めば間違いない。うだ。今後すすき原を望めば間違いない。この句を口ずさむに違いない。人は一夜にして変わると六甲は常々言う。弘志が一夜にして大変化を起こしたのだ。これは記念すべき作品になった。おりしも年末の第九を聴いた余韻でこの句に出会ったから余計の感銘したのである。

雪卿集

紙人形

市川伊團次

紙人形蚊帳吊草の蚊帳の内
姫昔蓬を床に生けてをり
秋の空大荒地野菊を撮らむ
大待宵草一輪掌に
秋雨に手水の水の溢れけり

秋夕焼

出口

誠

明月の光の剣が屋根を刺す
なわ張りを争ふ鳩の秋の昼
色鳥が川をにらみてすぐに発つ
風受けてすべて揺らぎて芒原
金色に染まる雲ゐて秋夕焼

雪卿集

蝮 蛄

佐津のぼる

草しなふ蝗の恋の終るまで
紅葉狩祠があれば小銭入れ
べびー靴垣根に干さば小鳥来る
きちきちや線路越ゆれば別の町
蝮蛄鳴くかはた耳鳴りの再来か

松手入れ

志方 章子

曼珠沙華一輪に人集まれる
垂れ枝に小舟出したる松手入
一輪の花となりたり月滲む
滲みたる月老いたるかと思ふ
秋の蜘蛛下がりをりたる糸見えず

雪樹集

団 栗

藤生不二男

団栗を踏んでどんぐり拾ひけり
どんぐりを茶店に残し帰りけり
おのづから転けてしまひぬ木の実独楽
木の実降る奥へ奥へを入りにけり
境内にいつもの出店銀杏散る

菊 人 形

田尻勝子

柿紅葉鉢底穴に当てにけり
稲架掛けの赤米束の五つなる
廊下にも紅葉の色の写りけり
清正の菊人形の虎を踏む
とろとろの色なき風やぼんのくぼ

蛩雪譚

六甲選

※病気は俳句の天助

二十七年新年号鑑賞

竹を伐る一本づつの空を引き

笹村 政子

「一本づつの空」と詩的に言ったのがいい。篋の中で竹を伐っても倒れないから切った根元を曳きぬくようにして竹を採る。そのとき空をも一緒に曳いているようだと思いが至ったのだ。竹を伐った者には覚えのあることで経験なくして詠みたい句であるが、経験がなくとも竹を伐る場面をじつと見ていて詠えたかもしれぬ。

隙間なき京料亭の秋簾

京都ならではの作。だができれば「京」というのを省きたい。京風の料亭と解釈も成り立つ。こういう場合「京都かな」などを冠したら、さすが京都だなあという感動の余韻が生まれる。

秋夕焼戸口に甘酸つばき匂ひ

これでいい。戸口とだけ言って、あとは何処のどんな佇まいか料理屋か、寿司屋か読者の味わうところだ。

くすぐつてやれば米搗くばつたかな

米つき飛蝗はシヨウリヨウバツタ（精霊蝗虫）のことで、特に雌はとらえやすく後ろ脚を持つたら身体を上下に振るので、その様子から人に媚びることを椰揄して「米つきバツタ」と言う場合がある。人は世間で生きのびるために頭を下げるが、自らを卑下してまで頭を下げる必要はない。むしろ頭を下げすぎると第三者から蔑まれる。つまり信頼をしてもらえない悲しいことになる。だが掲句のように自らの意志とはかわりなく、くすぐられて身体が思わず動いてしまうことは悲しいかな起る生理なのだ。くすぐられると痛めつけられる拷問よりも辛い。その拷問に耐えきれず飛蝗は蜥蜴のように脚をすててまで逃げるのだ。

六花集

引越しのトラックがゆく稲架の道
秋の田の刈られ現はる田の字かな
魚沼や刈田の風の豊かななる
いち早く湖岸秋色深まりぬ
水草に眠る魚見る秋思かな

平居滯子

秋の田の四方を囲む万国旗
満遍に霧吹きかける障子貼り
御作りの片口鱒匙で削ぐ
運動会走る姿も母親似
秋風や賑ひ外れ葛の実

秋田典子

祥月の墓地の辺りも末枯るる
草の絮濯ぎに付いて入りにけり
つはぶきへ番ひの蝶の後戻り
畦径に弾けんばかり葎の種
柿採りに来よと母より電話かな

大内幸子

遠ざかる野分の風や夜のしじま
人恋し虫の末枯れる夜寒かな
こほろぎに耳鳴り添ふる夜寒かな
心気泣きこほろぎとある夜長かな
木枯しや桜紅葉をひのふのみい

菊谷 潔

秋の雨庭の砂をも浚ひゆき
秋時雨グーチョキパーや水溜り
焼魚現れたるは秋の蠅
軒下の蜂の巣一つ空きの部屋
日短か手さぐりで見る鍵の穴

森山あつ子